知恵の話 ちえのわ

Vol. 21

フェンシング

会員　若林　　擴

フェンシングはケガの心配もなく出来る運動で，若者は勿論，老人，女，子供にとって最適なスポーツである。特にチームプレーは気が進まないものに相応しく，挑戦者に対し，テクニックとスピードと知力をもって闘い，個人技が楽しめるスポーツでもある。

剣は最も古い武器のひとつであり，歴史上色々な形の剣が戦争で使用された。昔の剣は重く，刃巾が広く，徒歩か馬上のどちらかで敵と戦う戦士は強い腕力を要求された。防御の手段として開発された甲冑の使用により剣は益々大きく重くなり，両腕は並外れた武器を振り回す力を更に必要とした。

火薬の発明により，銃と銃剣が戦争用として剣に取って代わり，フェンシングは騎士道にかなった礼儀正しい決闘用として残った。ヨーロッパの決闘は相手を殺すまで戦うのではなく，相手の体のどこかを一突きし，血を見たら勝負がついた。

武器としての長剣（ラピア）は，今やスポーツ用としてのフルーレ，エペ，サーブルの3種類に分かれて大きく変わった。

フルーレは全長110センチ，ブレードの長さは90センチ，剣身の溝に2本の電線が通っている。重さを軽くする溝のある断面は三角形，全重量770グラム以下である。

サーブルはブレード全体の断面が長方形又は先端から3分の1が長方形で，残りの断面が三角形であり，全長は105センチ，ブレードの長さは88センチ以下で，全重量は500グラムなど，剣は昔の長剣に比べて極めて軽くなった。

剣の柄（ヒルト）には棒状のフレンチ，Orthopaedic（整形外科型）又はピストルグリップなど指でしっかり柄を保持できる，握力の弱いフェンサーのため，イタリアン，スパニッシュ，ベルギアン，ヴィスコンチなどの変形スタイルのヒルトがある。

18世紀の終わりになると金属の網のマスクが発明され，剣先にポイントをつけたフルーレが改良され完全にスポーツ化した。マスクの針金の太さは，メッキする前に最小1mmで熱処理され，網の目は最大2.1mmで，マスクの網は前面及び側面を，円錐型の先端で12kgの圧力を掛けて突いても変形しない丈夫な構造になっている。

フルーレやエペのマスクの内側や外側は衝撃に強い絶縁物質で絶縁され，サーブルは有効面全体が伝導性であり，マスクの前面及び側面は伝導性で，マスクの垂れ（バベット）も，グローブもカフスも，メタルジャケットと同じ伝導性の生地を使用する。

フルーレは四肢と頭部を除いた胴体の突きが有効面である。

決闘用だったエペはそのままの形を残してスポーツ化しエペの有効面は決闘の名残で身体全体である。

軍隊訓練用の軍刀術としてのサーブルも乗馬を外してスポーツ化した為に，昔は戦闘に際して馬を傷つけることは不名誉であったので，騎兵の上半身のみを突くか斬った習慣から，頭部，両腕，胴体を含む上半身のみが有効面である。

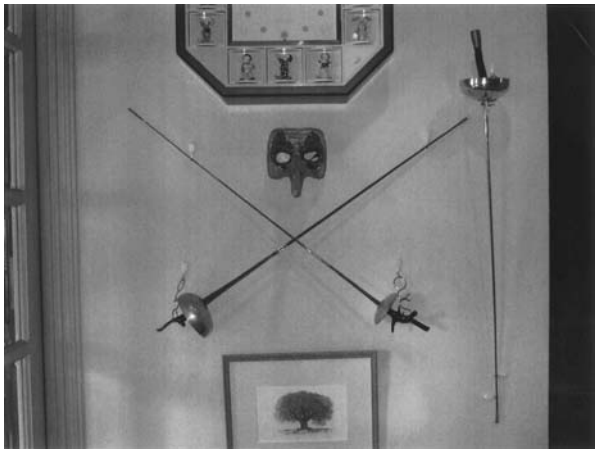
1989年に巾1.5メートルから2メートル，長さ14メートルのピストという選手が動くことが許される範囲の試合場を，昔は英語でアドバンスとリトリート（今はフランス語でマルシェとロンペという）と前後にのみ移動して闘い，1936年にエペ，1955年にフルーレ，1989年にサーブルの全ての種目が電気審判器で判定するようになり，観衆に勝負が判り易いようになった。

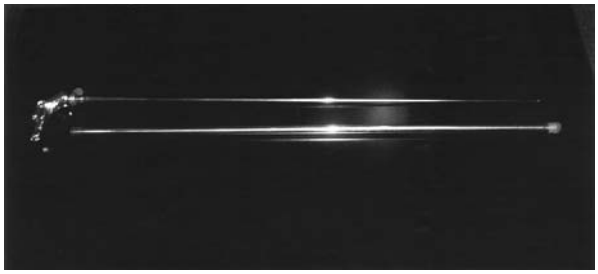
電気審判器は，突き（トウシュ）と突きの間の時間を測定し，突きを表示するランプと突きを知らせるブザー音が付いている。

この装置はピスト両端の選手の後方に置かれているリール（巻取り器）に巻き取られたコードに接続されている。

コードは選手にボディコードをユニフォームの下に通し，インサイドソケットとメタルジャケットに接続し，一方の端が選手の後ろでリールコードと接続し，他方の端がユニフォームの袖の中を通り，剣にリレーする鍔（ガード）の内側のインサイドソケットに接続される。

このコードは選手がピスト上を前進，後退するに伴い巻取り器がスプリングで伸ばしたり，巻き戻したり





する。

選手の剣先に設けたポイントがスイッチとなり突きによってコイルスプリングが縮圧され，接点が接触したり，離れたりする剣の種類の構造により，コードに電流が流れたり切れたりする。

フルーレでは，相手の有効面であるメタルジャケットを突くと色ランプが点灯し，無効面や絶縁部分を突くと白ランプが点灯する。

エペでは，相手のどこを突いても色ランプが点灯する。

サーブルでは，相手の有効面を突いたり斬ったりすると色ランプが点灯し，無効面を突いたり斬ったりしてもランプが点灯しないため空振りと看做される。

電気回路は，フルーレではポイントヘッドとブレードが接続されて相手を突くと回路が切れるが，エペは反対に相手を突くと2本のポイントコードが接続される。

50年以上前に中央大学のフェンシング部に一時所属したが，サリュー（礼）とアン・ガルド（構え）だけ習ってやめた。それ以来，何時かはまたフェンシングをと，長年我が家の玄関の壁面には，写真のようにフルーレとエペの剣がイタリアの仮装用マスクを挟んで飾られている。

体重がいよいよ90キロを超え，テニスではダブルスとはいえ，広いテニスコートを前後左右に走り回るのは何とも辛くなった。

フェンシングは前後にのみ動くゲームで左右には動かない。

FIE（国際フェンシング連盟）公認のブラックマスクを東京フェンシング商会で購入し，飾ってあったフルーレとエペの鋼（ハガネ）のブレードを，刀剣と同じ砥粉の打ち粉で磨いて貰い，ギラギラと輝く剣を引っ下げて，フェンシングクラブに加入した。

写真はプラスチックのパイプの中に，ガチャガチャ音を殺すシリコンゴムチューブでライニングしたフルーレとエペの剣と鞘で，ヒルトとガードのカバーと共に私がデザインして作らせたものである。

純金の首輪を巻いたグレイハウンドの猟犬の頭を，ヒルトに代え握りとして取り付けたフルーレのブレードを，ステンレスパイプ製の鞘に収めるように作らせた杖は，テニストーナメントでアキレス腱を切ったときの護身用に作らせた仕込み杖である。